

論文 / 著書情報
Article / Book Information

論題(和文)	知財見聞録 ケニア共和国の大自然
Title(English)	
著者(和文)	田中義敏
Authors(English)	Yoshitoshi Tanaka
出典(和文)	発明, Vol. 113, No. 3, pp. 42-43
Citation(English)	THE INVENTION, Vol. 113, No. 3, pp. 42-43
発行日 / Pub. date	2016, 3



知財見聞録

ケニア共和国の大自然

東京工業大学 イノベーションマネジメント研究科 教授 田中 義敏

躍動する大地

ケニアはアフリカ大陸の東海岸に位置し、国の中央を赤道が横切っている。国土の大半が標高1200m以上の高原である。内陸部には小灌木のサバンナが広がり、そこにライオンやキリンなどの野生動物が暮らしている。

サバンナのかなたには、ユネスコの世界遺産に登録されているケニア山がそびえる。ケニア山はおよそ300万年前、アフリカ大地溝帯（Great Rift Valley）と呼ばれる火山活動による地殻変動で誕生したといわれている。

この大地溝帯は、ケニアの北から南を縦断し、4000kmにわたる巨大な断崖をアフリカ大陸に築いている。地球内部の熱が大陸の下にたまり、マントルの上昇流が起きているこの地帯で、大陸が左右に引き裂かれている。

この地殻変動は、1年間に0.5cmという速度で、現在もゆっくりと進行しており、1億年後には、アフリカ大陸が二分されるという。大地溝帯地域はあまりにも広大な範囲に及んでいるため、はっきりとした断崖を目視できたわけではないが、躍動する大地を感じてきた。

ナイロビ国立公園

ナイロビのジョモ・ケニアッタ空港に到着する直前の機内から空港に隣接する大草原が目に入る。この大草原がナイロビ国立公園である。

ナイロビ中心部から直線で10km程度の至近距離にあり、首都の中にある国立公園としては最大規模だという。面積は117km²、ケニアの中では比較的小さいが、山手線沿線が2つ入るくらいの大きさはある。

ライオン、チーター、ヒョウ、ハイエナなどの肉食哺乳類、水牛、キリン、クロサイ、シマウマ、カバ、エランド、オグロヌー、インパラなどの草食哺乳類、その他の動物を含めて400種類に及ぶ動物が生息しているという。

ホテルでタクシーをチャーターして約3時間のサファリに臨んだ。とにかく広大な大地に生息する動物との出会いに胸をときめかせながら筆者は草原に入っていった。

サファリを実体験して分かったのは、車で走る道路沿いにいつでも動物がいるわけではないということだ。

広大なサバンナを走りながら動物との出会いを求め、こちらが彼らの居場所を探し回る必要があるのである。

最初に出会ったのはシマウマの群れだった。その近くにはインパラの群れ。なんと、21羽のヒナを連れたダチョウの家族も目の前に現れた。

ライオンには会えなかった

一人で車をチャーターしたので運転手も独り占め。サファリの体験と同時にさまざまな話を聞くことができた。

例えば、ナイロビ国立公園内では、万が一、同乗者が車の外に出てしまった場合、運転手は10年間の投獄という規則があるそうだ。同乗者が動物から危害を受ければ、観光客は来なくなってしまうからである。規則の整備とともに、公園内をパトロールが常に巡回して目を光らせている。



草をはむ美しいシマウマ

運転手は既に結婚して子どももいるという30歳ほどの若い男性だったが、多くの動物を筆者に見せるために、かなり頑張ってくれた。特に念入りに探したのはライオンとサイであったが、残念ながら、このいずれにも会うことはできなかった。

園内には最低30頭のライオン家族が暮らしており、朝日が昇る前に狩りを行い、早朝のうちに満腹となって、その後はサバンナの草原に身を隠して寝込んでいることが多いらしい。筆者が早朝にホテルを出られなかったのがライオンと会えなかった原因だろう。

現実の弱肉強食

しばらく走るとキリンの夫婦に出会った。長い首を大きく振り回しながら、互いに抱き合うような、実にほほ笑ましいしぐさも見せてくれた。

その場を移動すると、今度はキリンの死骸が目に入ってきた。黄色と茶色のまだら模様が美しいにもかかわらず、大きな体の一部だけが草原に横たわっている。早朝にライオンに襲われてしまったらしい。

国立公園とはいえ、大自然の弱肉強食そのものを見せつけられた感じで、心が動揺してしまった。

その他の場所にも貪欲に訪問

国立公園から30分くらい移動した所に、かつて絶滅の危機に瀕したロスチャイルド・キリンの繁殖施設として設立されたジラフセンターがある。

現在は、ケニアの学校生徒を対象にした保護および教育プログラムが実施されているという。そこではペレット状の餌が用意されており、筆者も餌付けを楽しんだ。

また、多様な文化や生活様式を知ることができる観光村のボマス・オブ・ケニア（1971年に設立）も訪問した。そこでは、ケニアの民族アイテムが展示されているだけでなく、伝統音楽や踊りなどのショーも楽しめる。

多くの子どもたちが学校の社会科見学でここを訪れているようだ。子どもたちの表情を見ているほうが楽しく、シャッターを切った。無邪気な子どもたちの笑顔がとにかくかわいかった。

最後にJICA専門家として現地に駐在する方々が、ナイロビ郊外のナイバシャ湖という大自然のリゾートを案内してくれた。ここにもカバやインパラ、ルーなど、多くの動物が生息している。

人生初となるケニア訪問であったが、大自然の中でひと息つける至福の時間を満喫して同国を後にした。



ダチョウの家族



ジラフセンターで餌付け



無邪気でかわいい子どもたち



じゃれ合うキリンの夫婦



ボマス・オブ・ケニアでの民族舞踊



ナイバシャのホテルでひと休み